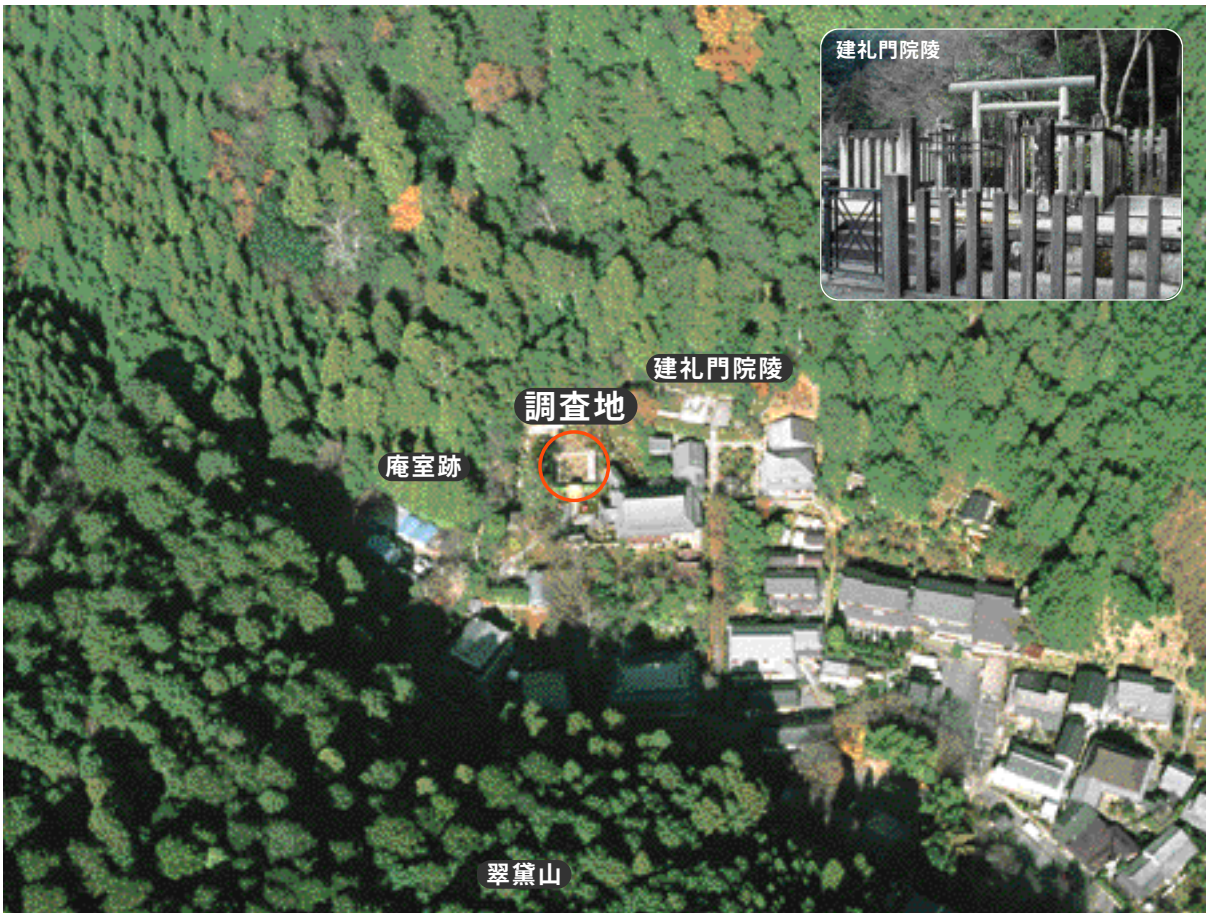
発掘ニュース48

寂光院本堂の調査

（財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



上空から見た寂光院とその周辺（写真上が北）

左京区大原にある寂光院は、平家の菩提を弔う建礼門院徳子（1155～1191?年）の隠棲の地としてよく知られています。今も「みぎわの桜」や「翠黛山（すいたい）」、「庵室（あんじつ）跡」など『平家物語』潅頂記にちなむ種々の遺跡が周辺に残っています。寺伝によれば推古二年（594）に聖徳太子が用明天皇の菩提を弔うために開基、本尊地蔵菩薩立像も太子の手になると伝え、初代の住職は太子の乳母、玉照姫とされています。また、慶長八年（1603）荒廃した寺を豊臣秀頼の母、淀君が浅井家の菩提を弔うために再興に手を尽くしたことが、本堂正面に掛けられていた額に記されていました。

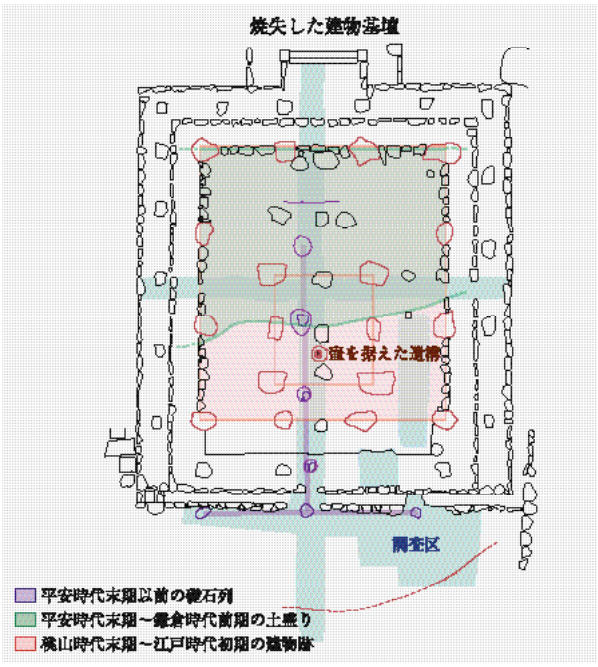
その寂光院の本堂が2000年５月８日未明に焼亡、重要文化財である本尊の木造地蔵菩薩立像（鎌倉時代）も著しく損傷したことは大きく報道されました。

寂光院では本堂の再建を計画、そのための資料収集作業の一環として、当研究所に２つの調査依頼がありました。

まず、2000年７月から本堂焼け跡で床下などに焼け落ちた部材や炭などの中から、法具類や装飾品を探し出すための確認調査を行ないました。焼け跡の炭や灰を全部掻き出して丁寧に選び分けたところ、その中から火災の凄まじさを物語る、焼け焦げた木製の小仏や

確認調査

平安時代末期以前と桃山時代末期～江戸時代初期の遺構（北から）



遺構の変遷（1：200）図は左写真にあわせて下が北

熱で溶解・変形した金属製の仏器や装飾品などの破片がたくさん出てきました。

次いで、焼失した本堂がいつ頃建てられ、その前はどのような状態であったか、その変遷を明らかにすることを目的として、2000年12月より本堂基壇の発掘調査を実施しました。調査は本堂の基壇の中心に直交する細長い十字形の調査区を設け、基壇の土層の状態を調べることにしました。

調査の結果、本堂は同じ場所で少なくとも２度の大きな建替えが行なわれていたことがわかりました。最も古い段階の遺構は、南北三間×東西一間以上の礎石建物で、やや北寄りの位置で検出しました。山の斜面を整形して建てられており、詳しい時代はわかりませんが、少なくとも平安時代末期よりも前と考えます。次いで、平安時代末期から鎌倉時代前期にはその礎石建物を壊して、本堂の基壇がほぼ現基壇の大きさにまで土盛りをして南に拡張されます。このときの建物の柱跡については今回の調査では検出できませんでした。最後の改変が桃山時代末期から江戸時代初期に行なわれ、本堂の内陣の礎石はこのときに据えられたことがわかりました。この内陣のほぼ中央、本尊の地蔵菩薩立像の真下にあたる位置に、本堂を建てる際の地鎮めと考えられる遺構を検出しました。土師器皿で口を密封した信楽焼の壷を据え、その上に白磁壷の破片をかぶせていました。

今回の調査では、寺伝にあるような創建に係る遺構や遺物は得ることができませんでした。発掘調査で得られた遺構・遺物からは、建礼門院が入った頃にはすでにそれ以前の荒廃した礎石建物があり、おそらく建礼門院の大原入り前後の平安時代末期から鎌倉時代前期に基壇に土盛りが施されて南へ拡張され、建物の根本的な建替えが行なわれます。その後、再び荒廃したようですが、本堂の額銘に「寂光院御再興、黄門秀頼卿御母儀、浅井備前守息女為二世安楽也」とあったように、桃山時代末期から江戸時代初期に豊臣秀頼の母、淀君によって再興され、本堂内陣についてはこのときに建てられたというような変遷が考えられます。

このような歴史をもった寺院の本堂が焼失してしまうというようなことは二度とあってはならないことです。2001年10月８日、再建に向けての起工式が行なわれ、焼失前の本堂の再現工事が開始されました。　　（高橋　潔）

壷を据えた遺構